

レヴュー／ちんぷん義

最終回

矛盾の構造

本邦初演のこの稿も、天命が下って、終演である。「居心地」がつまるところ何者なのか、それが実は談義の目標なのだが、まだ明らかにされないままに終わるのはいかにも気が引ける。今までを振り返りながら次のステップの足がかりをつかんでみたい。

身体に直接に響いてくる「快適性」とはあくまでも峻別されて、「居心地」は快適よりも総合的な気分である。さらに、「居心地良さ」は、「居心地」が「居るところ」の「心地」なら、どん

な「心地良さ」かを、多くの事例から告げられる、寛いだ、安らいだ、安心感、幸福感などから、それらを代表して、とりあえず「平安な気分」とでも言っておこう。総合的で平安な気分なのではないか。

「居心地」という言葉の背後には「受動性」と「包摂性」がある。人は居るところで、周囲から発せられる何かを受ける「受動性」と、包まれる状態の「包摂性」がある。受けて包まれる状態での平安な気分ということになる。人は物的世界がそれをやってくれる

無償である。母性をそなえている女性性は大きなヒントである。

とりあえず、触れてきたところだけで考えてみると、このような仮説に行き当たる。

さてそれでは今後は？

「居心地良さ」は他人には分らない。たしかに他人から見れば、居心地良さそうに見えるだけである。金魚鉢の金魚が居心地良さそうに泳いでいる、というのと同じである。しかし、「美」もそうである。「美しいと感じた」というのは他人には分からない。そう表明してもらって分かる。そのようにお互いが言い合って「美」を創ってきた。「居心地」もこれからそうならないだろうか。

「美」が「学」を求めたように「居心地」も「学」へ、すなわち「居心地学」の誕生である。みんなであれこれと論議をしているうちに、見えてくるものがあるのではないか。



え・安原喜秀

いま流行の「居心地」は自然に、暗黙のうちに「居心地良さ」を想定している。

「学」は居心地良さだけでなく、「居心地」そのものを考える段階にも至るだろう。なぜか。

二十一世紀になっても、居心地良さを破壊する、暴力や略奪や占有や疑心暗鬼やいじめなどなどの争いが絶えない。これを「居心地」の、〈願望されながら破壊される〉という矛盾の問題ととらえることはできないだろうか。

のを望む。理想郷がそうであるのは、完全に「向こう側」として平安な気分が包まれるところであるからだ。そしてときにそれは、もっと直接包まれる、母胎回帰にまでなってくる。

さらに日本人にとって、最大のものが自然である。自然に抱かれるとき「居心地良さ」がある。それはあくまで人間が切り取った、怖さの除かれた自然、人間に都合のいい自然であるのだが。

また人と人が居心地良く暮らしているこうとするなら、愛、思いやり、という言葉ではなかなか具体的ににならない場合には、この「受動性」と「包摂性」をまず先に思い起こしてみるのも良いかもしれない。お互いがこのことを望み、相手に対しお互いがそれをもたらしそうとする。それはお互いに心理的に包み合うということにもなる。この場合、母なるものはとても大きな力である。多くの場合それは無限であり

地球はこの矛盾において動転されている。

それは居心地良さの願望ばかりではなく、居心地悪さへの願望が、諸所行の原動力にもなり得る事態を見据えることにもなる。「居心地を求めていたら人は何もしくなってしまう」というのとは違うのだ。

まずは根っこにある経済と、表層にある欲望の構造との関連に、眼をこらすことからはじめてみるべきなのかもしれない。

ほかに、身近で切実な問題、たとえば日々の生活を覆う不安、恐怖をどのように取り除くのか。本当に居心地のいい居場所を探し続けるといって人生上の居心地、生老病死にある居心地について、とくに死後の居心地についても射撃内にあるのは当然である。

お付き合いくださった皆様には、心より感謝を申し上げます。